

Christopher Marlowe の The Jew of Malta について

中 山 浩 一
谷 崎 寿 人

イギリス文学のルネッサンス期には、文学史上きわめて顕著な活動が演劇においてなされた。当時演劇は、イギリスの全階層にわたって異常な流行を見たが、その結果劇場・劇団・劇作家といったしくみでは、今日の演劇にくらべ遜色のないほど成長するにいたった。とりわけ民間の劇団が、古典劇・仮面劇・悲劇といった伝統的演劇の影響を受けて、多彩な進展をとげようとしていた。こうした動きに大いに貢献したのは、これらの伝統に通暁した University Wits といわれる大学教育を経た文人たちだった。

Christopher Marlowe は中でも最たる存在で、奇しくもシェイクスピアと同年に誕生し、Tamburlaine the Great, The Tragical History of Dr. Faustus, The Jew of Malta そして The Troublesome Reign and Lamentable Death of Edward II などを通して同時代の観客の共感を得、劇作家の範となったが、エリザベス朝人にもっともふさわしい仕方では生涯を終える運命にあった。

彼の第三作にあたる The Jew of Malta は金貸しのユダヤ人 Barabas の生涯を賭した金銭欲を描いたものであるが、地位とか名誉といったものから隔絶された一介の庶民が、苛酷な運命に立ち向かう荒っぽい姿勢は、当時の観衆の共鳴につらなっている。さらにそれは、ルネッサンスにおけるイギリス独自の人間性と目され、ヨーロッパにおける宗教的圧迫からの離脱といった形をとらず、ヨーロッパそのものから政治的・社会的・文化的に自覚し独立せんとするエリザベス朝の思潮に同調するものであった。

これをうらづけるもう一つのは無韻詩で、脚韻を使わないかわりにさまざまな破格が可能となり、これがまた詩劇の要請と相俟って、ヨーロッパの古典からイギリスの想像へと雄飛する原動力となったことはきわめて重要である。彼がこうした詩型の完成に貢献した筆頭であることは A. C. Swinburne の言葉を借りるまでもない。

The Jew of Malta は当時相当の人気であったらしいが、時代を異にする読者たち

にとってはかならずしも好評といえないようである。筋の途絶からくる幕間の不調和・登場人物の種類の限界・人物描写や多彩さの不足など、およそ自己主張の過度にわたることによる欠陥といったものが付随してくる。しかしながら、われわれの評価が当時のそれと相違するのは当然であって、T. S. Eliot のように悲劇としてとらないで、その韻律から笑劇としてあつかう批評もあるのである。しかもそれが、古い英国のユーモアとしてディッケンズと同質視され、逆に現代読者の生硬さとか文学的衰弱を揶揄するという見方もあって、表面的・主観的解釈のみでは如何ともしがたい側面をのぞかせている。

とはいってもものの結局、読者は各人各様の受けとり方をする事となつて、これを避ける術はない。しかしながら、エリザベス朝の大衆を魅了し観劇に酔わしめたマーロウの所以に的をしぼるとすれば、韻律とそれから醸される調子と事後に残る可笑しみなど、かなり評価の歩調も揃う点もあると考えられないであろうか。

1

マルタ島のユダヤ人バラバスは無限の富を追求し、この目的達成のために権謀術数を駆使し、そのため破滅に至る。しかし無限の財産欲が非業の最期をまねくことになるというのがこの劇の主題であろうか、マーロウのこの劇執筆の意図は何であったか。そしてそれは成功したのか。また当時の観客および後世の読者はこれをどううけとるだろうか。

しばしばいわれることであるが、第一幕第二幕のバラバスには同情できるが、第三幕以降のバラバスには反感を覚える。特にバラバスがその娘アビゲイルを——アガムムノンがその娘イフェゲーニアに注ぐ愛と等しいほど (l. 176) 愛していたのに、自分の犯した罪の暴露を恐れて謀殺するにおよんでは。復讐者には復讐の動機があり、それにしたがって行動する主人公の心情にそって観客はそのやむをえざることを理解するものである。それが第三幕以降においては全く失われてしまう。ここに第三幕以降は共作者が加筆したか、あるいはマーロウ自身の筆になるとしても完成を急いだため調和統一を欠いたか、想像力の衰退のためかといわれる理由がある。しかしこれらの点については、特に加筆の点については推測であって本文はすべてマーロウの所産であると断じている批評家もある。¹⁾そこで本文に加筆があるかどうかの問題はぬきにしてここでは劇の展開にしたがって検討したいと思う。

この劇は無神論者——正確には反カトリックというべきか——マーロウの面目躍如たるもので、マーロウ自身がバラバスの口を通して、当時のキリスト教徒の偽善を暴

露したものと考えられる。たとえばバラバスはこういつている。

Rather had I a Jew be hated thus,
Than pitied in a Christian poverty:
For I can see no fruits in all their faith,
But malice, falsehood, and excessive pride,
Which methinks fits not their profession (ll. 151-6)

マーロウがこのような思想を抱くに至ったのは、当時の学生の間にかんにおこなわれていたマキアヴェリ研究によるものであろう。この劇では前口上にマキアヴェリを登場させ彼の思想を述べさせているわけであるが、宗教を a childish toy (l. 14) というのや、堅固な城が他を制するのに必要というのはマキアヴェリの思想に反するものである。しかしこのことはともあれ、「マルタ島のユダヤ人」の一方の端には、反キリスト教思想を背負ったバラバスが、他端にはキリスト教徒であるマルタ島総督のファーニーズがあり、この両者が攻防をつくし結局バラバスの決定的敗北となる。バラバスの死に至るまでには、ファーニーズによるバラバスの全財産没収があり（事実はこちらに反する）、バラバスはファーニーズに対する憎しみをその息子ロドウィックにむけこれを謀殺したり、またトルコ軍に内通してマルタ島占拠にみちびき総督ファーニーズを捕えるということがある。舞台上の諸事件はすべてこの両者を結ぶ線上にあり、両者の確執と特にバラバスの狂的復讐心のもたらしたものである。

2

バラバスの（背後にはマーロウの）キリスト教徒攻撃は、総督ファーニーズがトルコに対して十年間滞納した貢を、トルコ皇帝の息キャリマスがとりたてに来島し、ファーニーズがその財源をマルタ島のユダヤ人達に負担させる布令を発し、それに反撥するところからはじまる。その布令の内容は次のとおりである。

1. 貢税はすべてユダヤ人が支払うべきこと。そのため財産の半分をとりたてること。
2. もしくはただちにキリスト教に改宗すべきこと。
3. 改宗を拒むものは、全財産を没収されること。

この条件に関して、他のユダヤ人は1の条件に服するが、バラバスのみ1,2を拒否し、全財産を押収され、家は女子修道院にされてしまう。そこでバラバスとファーニーズの以下のごとき応酬となり、ここに悲劇が芽生えてくることになる。

Bar. Will you then steal my goods?

Is theft the ground of your religion?

Fern. No, Jew, we take particularly thine

To save the ruin of a multitude:

And better one want for a common good,

Than many perish for a private man:

(ll. 327-32)

Bar. What, bring you Scripture to confirm your wrongs?

Preach me not out of possessions

(ll. 343-4)

ファーニーズの発した苛酷な条件は、バラバスがそれらを拒否するであろうことをみこしてである。その上で全財産没収ということになれば恐らくうしろめたく思っていたことだろうが、バラバスにあまりにも明白に「盗みがキリスト教徒であるあなたの宗教の根本か」といわれても「民衆のためにひとりが苦しむほうが、ひとりのために多数が死ぬよりまし」との答えしかでてこない。これではバラバスの怒りは燃えさかるばかりで、いささかも彼を納得させるものではない。さらにこの両者の応酬は次のようになる。

Bar. Some Jews are wicked, as all Christians are;

But say the Tribe that I descended of

Were all in general cast away for sin,

Shall I be tried for their transgressions?

.....

Fern. Out, wretched Barabas!

.....

Excess of wealth is cause of covetousness:

And covetousness, oh 'tis a monstrous sin!

(ll. 345-57)

この引用の第1行「すべてキリスト教徒は悪人だ」という痛烈なことばは、バラバスにとってはどんなに口先でよいことを言おうともキリスト教徒は信頼できないということが基調になっている。そして最後に（第五幕第三場以下）ファーニーズを信用して、キヤリマス謀殺の計画に参加させたばかりに、彼バラバスは死に至るのであり、まさに策におぼれたものである。またこの引用最後の2行「あまりにも多額の財産は強欲のもと、強欲は許すべからざる罪」という説得を試みるが、もちろんバラバスの

うけいれるところとはならず、「蛇のように賢く」とのぞんでも「鳩のように素直に」とはのぞまぬ(II. 797-8) バラバスにとっては、さかしらに「強欲」を非難されることによってさらに復讐心をあおりたてられることになる。しかもこの「強欲」はバラバスを含めたユダヤ人のみの性癖でなく、キリスト教徒なかんずく修道士にそれが強くみられることを熟知していたバラバスにとっては。

第四幕第一場で、憎しみの対象ファーニーズの息子ロドウィックと娘アビゲイルの恋人マサイアスを謀殺し、世をはかなんで修道院入りした娘の口からこの殺人の発覚を恐れるあまりアビゲイルを含め尼僧すべてを毒殺してしまう。アビゲイルの告白により事実を知った二人の修道士があらわれ、バラバスに悔いあらためることを強要する。バラバスは悔いあらためる風を示しながら、その証しとして莫大な全財産をこの二人のいずれかの教団に提供し帰依することをほのめかす。この時二人の修道士はともに己れの教団にといさかいを始め、バラバスをとりあい互にあらそう情景が展開される。これはマロウによるキリスト教徒への積極的攻撃である。

また「財産を奪った以上私の生命をも奪え」というバラバスに対してファーニーズはひややかにいう。「手を血でぬらすことはわれわれのよくするところではない」と。これに対するバラバスの台詞

Why I esteem the injury far less,
To take the lives of miserable men,
Than be the causers of their misery. (II. 379-81)

は凄絶な叫びである。しかしファーニーズはこれにとりあわず

Content thee, Barabas, thou hast naught but right. (I. 385)

とうそぶく。もっともこれは表面のやりとりであって、財産は奪われ家は女子修道院にかえられても裏面ではぬかりなく巨額の財宝を旧居の床下にかくしておき、アビゲイルを使ってもちださせ再び富裕になるということはあるのだが。

バラバスの宗教観を示すものとして、旧居にかくした財宝入手のためアビゲイルにいつわりの修道院入りを求め、彼女がためらいを示した時に、バラバスは「宗教というものは数々の悪事を疑いの眼からかくしてしまうものだ……」という。

Bar. Ay, daughter; for religion
Hides many mischiefs from suspicion.

.....

Abig. Thus, father, shall I much dissemble.

Bar. Tush!

As good dissemble that thou never mean'st
As first mean truth and then dissemble it,—
a counterfeit profession is better
Than unseen hypocrisy. (ll. 519-30)

バラバスがいつわる相手はキリスト教徒でありトルコ人であった。キリスト教徒は表面をつくろいながら恫喝することがあったからだ。

奴隷市場でイサモーを買って後、バラバスはイサモーに次のように訓戒する。

Bar. Hast thou no trade? then listen to my words,
And I will teach thee that shall stick by thee:
First be thou void of these affections,
Compassion, love, vain hope, and heartless fear,
Be moved at nothing, see thou pity none,
But to thyself smile when the Christians moan. (ll. 932-7)

ここにはただ一途にキリスト教徒を憎悪する心があるのみである。彼が復讐をなしとげるためにひきいれたイサモーをぜひとも彼の意を体するものに作りあげなければならぬ。そのためにはバラバス自身の数々の過去の悪事を述べ、現在に至ったと語る。そして結びとして次のようにいう。ここで復讐の共犯者が生れでるのである。

Bar. ……: make account of me
As of thy fellow; we are villains both:
Both circumcised; we hate Christians both: (ll. 978-80)

ユダヤ人—金貸し—極悪非道の人物、これがファーニーズの脳裏にある定式であって、その代表者がバラバスであるとすれば、いかなる手段をもってしてもバラバスを破滅させなければならない使命感がファーニーズを行動せしめた。一方バラバスはこれに対して全くあいられないファーニーズに、これもいかなる手段を用いても復讐しなければならぬと決意し、彼にとって最も痛手となるものとしてロドウィック殺しを敢行するわけである。そのロドウィック殺しの手段として、娘の恋人マサイアスを利用し、両者をたたかわせるようにしむけて共に倒れることになるのであるが、もちろんマサイアスに対してはうらみはないはずである。しかしひとつにはマサイアスはユダヤ人でなく (Faith is not to be held with Heretics / But all are heretics that are not Jews [ll. 1067-8]) また他方マキアヴェリの人物であるバラバスにとっては利用できるものは何でも利用するのが信条であった。その後の一連の殺人——アビゲイルと修道女毒殺、修道士バーナダイン殺しと、バーナダインを殺したと思いこんで処刑され

る修道士ジャコモウ、娼婦ベラミラ その情夫ピリアボーザおよび奴隸イサモー毒殺——はすべておのれの殺人計画遂行後発覚を恐れての所行である。これは単に無限の財宝に対する執着のひきおこしたのではなく、憎むべきファーニーズに対する復讐の連鎖行為であり、マキアヴェリの謀略の当然の帰結である。

3

前節において、ユダヤ人バラバスがキリスト教徒ファーニーズを憎悪し、復讐を誓ったことがこの悲劇を生ぜしめたと述べたが、バラバスの財宝に対する無限の欲望を否定するものではない。バラバスのその欲望を示す部分は随所にみられる。第一幕冒頭の独白はいうまでもなく、アビゲイルを使って修道院に変えられた旧居から隠匿しておいた財宝をもちださせる際、その出立にあたってこまごまと指示を与えることが数ヶ所傍白としてある、それは観客にとっては滑稽なほど真剣なものである。

Bar.

And think upon the jewels and the gold,

The board is marked thus that covers it.

.....

The board is marked thus that covers it.

.....

To-morrow early I'll be at the door.

.....

Farewell, remember to-morrow morning (Il. 591-606)

真夜中近く、バラバスはアビゲイルから無事宝石、金のはいった袋を手渡され思わず次のように叫ぶ。

Bar. O my girl

My gold, my fortune, my felicity !

Strength to my soul, death to mine enemy !

Welcome the first beginner of my bliss !

O Abigail, Abigail, that I had thee here too !

Then my desires were fully satisfied :

But I will practice thy enlargement thence :

O girl ! O gold ! O beauty ! O my bliss ! (Il. 689-95)

ここには観客をひきこむような純粋な叫びがあり、娘アビゲイルがいとおしいという

気持の表白がある。

これに対して、のちにペラミラとピリアボーザにそそのかされたイサモーがバラバスをゆずるとき (IV, v) は、イサモーの背信に対する怒りもさることながら、要求の額を渡さずかえって殺害を計画し実行する強欲ぶりを示す。アビゲイルをも殺してしまったバラバスにとっては信ずることのできるものは財宝しかなく、財をいかに増大せしめるかと腐心していたわけであるから、イサモーがかつての盟約 (……make account of me / As of thy fellow: we are both villains) を破棄し、ペラミラ、ピリアボーザの一味に加わったことは死をもってそれに報いる敵とみなし、また一計を案じこの三人を死においやることになる。

第五幕第三場で、バラバスがキャリマスの手引きをしたために、ファーニーズはトルコの軍門にくんだり、かわってバラバスが総督に任命されることになるが、ここでまたバラバスはマキアヴェリ的才腕を発揮して捕われのファーニーズを自由にし、逆にキャリマスの滅亡をはかる。そしてその代償としてファーニーズから巨額の金銭をうけとることを案出する。

Bar.

What will you give me if I render you
The life of Calymath, surprise his men
And in an outhouse of the city shut
His soldiers, till I have consumed 'em all with fire?
What will you give him that procureth this?

Fern.

And I will send amongst the citizens,
And by my letters privately procure
Great sums of money for thy recompense:

.....

(II. 2180-90)

しかしこの取引はバラバスにとっては最大の誤算であった。キャリマスは捕われ、彼の兵士達は爆発で死亡するが、ファーニーズにより自分のしかけた罠にかかり呪詛しながら死んでゆく。勝利者はファーニーズであった。

4

この劇が悲劇かどうかの命題に対しては種々の意見がある。様式の上ではバラバスの悲惨な結末ということでもまさに悲劇的要素を備えているものといえる。しかしたと

えばヘンダースンは²⁾「少なくとも精神においては野蛮な諷刺喜劇」(Though described on the title page of the 1633 edition as a tragedy, the Jew of Malta is, in spirit at least, a savage satirical comedy)と断じている。マーロウの意図がどこにあったのかにわかに断定はできないが、バラバスの悲壮な死は観客の感情を浄化させるはたらきをもっているであろう。しかしまたバラバスの死そのものが悲壮感をもつてうけとめられるかどうか疑問でもある。ともあれ当時この劇は相当の上演回数があったようであるから、観客に教訓を与える点では成功したのであろう。

第一幕・第二幕のバラバスは踏みつけられ、しいたげられるものの象徴である。他のユダヤ人はあきらめて責を負担することになるがバラバスはそれをしない。この段階では反キリスト教的言辞を弄しても観客の同情をあつめるであろう。だがその後種々策を弄するにおよんで悪の象徴となる。

第三幕以降バラバスの死に至る構成には、マーロウの観客に対する妥協があったのではないか。したがって当初の意図とは異なった結果をもたらしたのではあるまいか。第一幕でキリスト教徒を徹頭徹尾攻撃し、ファーニーズと堂々と渡りあったバラバスが第五幕第三場で、仇敵ファーニーズと取りひきするとは考えられないことである。もちろん観客はこの両者の取引が遠からずバラバスに死をもたらすであろうことを予知する。殺人事件がかさなるにつれて、最初のロドウィック・マサイアス殺しの時ほど観客に衝撃を与えず次第に卑小な人物に変じてゆくバラバスの死場所をマーロウは求めていたのであろう。そのためにはファーニーズが手をくださうにしなければならない。ロドウィックは殺してもファーニーズを殺してはならなかったのだ。

何がこのような妥協をさせたのか。もっともありうることは上演のため完成を急ぎ安易にメロドラマ仕立てにしたのではないか。またひとつには無神論者の誹謗されたマーロウにとっては

Fern. ……

So march away, and let due praise be given

Neither to Fate nor Fortune, but to Heaven. (ll. 2409-10)

というファーニーズのことで幕をおろさなければならなかったのではあるまいか。

* 幕と場の区分は Christopher Marlowe (Five Plays) edited by Havelock Ellis A Mermaid Dramabook によった

1. たとえば Margrette Thimme and D.M. Bevington 'From Mankind to Marlowe' p. 219
2. P.Henderson: Christopher Marlowe p. 22

(なかやま ひろかず 本学助教授 英語)
(たにざき ひさし 本学講師 英語)